

観世の称号「織部」について

—『伊賀国服部氏参考』と林羅山—

重田みち

歴代観世大夫の官職名を模した称号としては「左近」がよく知られているが、江戸期に「織部」という称号も使用されていた。ここではこの「織部」について述べておきたい。

そもそも室町末期に八世元尚が初めて「左近」を名のつて後、十一世重清まで観世大夫は「左近」または「左近大夫」を称していた。が、宝生家からの養子、十二世重賢は「左門」と別号を称し、十三世重記(滋章)の「織部」と、別号が続いていく(注1)。

「織部」は、右の重記が貞享二年(一六八五)に名のつた(後述)のが最初で、続いて十四世清親が名のつている。次に十五世左近元章の弟清尚(後の十七世大夫)が、別家(後の鏡之丞家)初代として兄左近と併行し「織部」を称してから、同号は「左近」に次ぐ格を表す号として扱われ、別家二世出身の十九世大夫清興、別家三世清宣も同号を称した。以後は絶えてしまったが、同号は十八世紀いっぱいまで集中して見られたのである。

さて、先の十三世重記は、十一世重清、

で医者であった、結崎玄入の実子である。この玄入は、宝永元年(一七〇四)から二年にかけて『伊賀国服部氏参考』(以下『参考』と略す)・『観世果葉履歴』という系譜関係の二書を編集しているが(注2)、その『参考』(服部氏の由来・経緯にかかわる様々な説を集めた書)の方に、「織部」に関する記事が見られる。従来、称号「織部」は、観世家の祖先とされる服部氏と縁が深い官職「織部司」に由来したであろうと想像されてきたが、その推測を裏付ける『参考』の記事はあまり注目されてこなかったため、ここに触れておこう。同書冒頭の、『新撰姓氏録』を引いたとする次の記事(同書に同文あり)に、

「織部(司)」の語が見えている。

服部連 燂之速日命十二世孫、麻羅宿禰之後也、允恭天皇御世、任織部司、掾領諸国織部、因号服部連

服部氏と「織部」を結びつける資料で、別説に由来するものが見当らないこともあり、編者の子である重記が「織部」を名のつたの

は、まさしく右の説によつたのであろう。もっとも、初めて「織部」を称したのは「参考」編集よりだいぶ前、貞享二年(一六八五)の末で二十歳の時であった。これは、先述した『観世果葉履歴』の重記の項に次のように記されていることによる。

初号三市三郎、貞享二年乙丑冬十一月朔日、依上意重賢養之統家、改織部、時二十歳、翌年被仰付家督、…

重記の家督相続は貞享三年五月であったことが由緒書から明らかだが、『柳營日次記』同年三月二十五日の条に、公家衆饗応能の出演者「織部」の名が記されているので、前年に改名したとの右の記事は事実であろう。したがって、先の『新撰姓氏録』の説は、貞享二年以前から観世家周辺に知られていたことになる。しかもそれは、後述するように十世大夫重成にまで遡る頃であるらしい。

『参考』の説は、前掲説と末尾の説を除き「藤堂大学頭」(川高陸、伊賀の領主)から贈られた資料に基づくことが本文に記されており、末尾の説には「右自林大学頭二考来大猷大君御時寛永系図抜粹也」との注記がある。将軍家光時代に「林大学頭」(羅山)を編集責任者として編まれた『寛永系図』(『寛永諸家系図伝』)による記事とのことで、確かに同書に「参考」のもとになったと思われる

記述がある(注3)。また注意すべきは、『寛永系図』の「服部」の項に、次のように『新撰姓氏録』の説が引かれていることである。

今按するに、姓戸録には、燂之速日命の末裔なり、允恭天皇の御世に織部司に任し、諸国の織部を拾領す、よって服部の連と号す。その子孫伊賀国服部の郷を領す。

(統群書類従完成会編『寛永諸家系図伝』
△仮名本Vの本文による)

この記事の存在から、『参考』の冒頭の説が、末尾の説同様『寛永系図』と縁が深いことは、間違いなからう。

さらに興味深いことに、『寛永系図』の編集責任者たる林羅山と観世家とを結びつける資料が、別に存在する。小鼓方の観世新九郎家文書中の『観世小次郎信光画像讚』がそれで、奥書に次のようにある。

観世小次郎信光贊詞者、輩下相国禪寺長老宜竹周麟所ニ撰述ニ而載ニ之於翰林葫蘆集。方今依ニ觀世左近大夫重成之所ニ乞而不ニ克ニ峻拒ニ、遂写之ヲ以投贈焉。ノ寛永十八年季秋廿三日ノ夕顔菴道春

(「羅山」印あり。句読点・返り点筆者)

室町期の禅僧宜竹周麟の手になる『翰林葫蘆集』所載の同書を、十世重成の要望によって林羅山が書写・贈与したとの内容である。

一方この本文には、観世家の出自が服部氏で、

伊賀国の甲族だとの記述がある。『参考』の『寛永系図』と同系の記事も、細かいいきさつは不明ながら、服部氏に関するゆえに、この記事同様羅山から重成に伝えられたもので、それを後年、重成の子である玄入が『参考』に書き留めた可能性が強からう。『観世小次郎信光画像讚』の奥書の年記が、『寛永系図』の編集期間(寛永十八年二月〜二十年九月)にあることも注意される。重成と羅山との結びつきが、観世の称号「織部」誕生のきっかけとなったものと考えたい。

なお、『参考』が冒頭に『新撰姓氏録』の説を掲げたのは、説の古さもあるが、重記が称した「織部」号の由来説を最初に掲げておきたいという、父玄入の意図が働いたためかと思われる。

(注)1 この辺りの事情については、表章氏「観世「左近」大夫考」(『観世』平成二年一月〜三年十月)に詳しい。

2 重記及び玄入については、『能研究と評論』第20号所載の拙稿参照。また、この二書は(『観世文庫』年報『花伝』第二号に翻印されている。

3 但し、両記事間には内容の食い違いなど多少の疑点も存するが、本稿では紙数の都合で詳述は避ける。

(学術振興会特別研究員)